教職研修の道を求めて

―教職２０年を顧みて，共同研修で育ってきた私―

第二中学校教諭　岡　田　明　男

４月に教職２０年目を迎え，心新たに勤務に励げもうとしたのも，つかのま，急に５月に病床に伏すことになり，７０日間にわたる闘病生活が始まった。病院での日課は規則正しく検温，回診，点滴，食事，これ以外は，病人はベッドに寝ていることのみである。点滴で手が動かせないときはともかく自由になると活字に対する飢えは飢餓のときの嬰児のごとく，身近なところで販売されている新聞，週刊紙に始まった。しかし，日がたつに従い定期購読している雑誌を家から取り寄せたり，日頃読みたいと思っていた小説，専門書などを指示し運ばせた。

病室に生徒からの千羽鶴が吊されると，１日も早く学校での勤務につきたいと気持ちがせくのである。そして退院し登校したら，日頃できなかったことや不満足な点を，ああしたい，こうしたいと心が動く。そこには教科面，学級経営，校務分掌などであり，特に担当する技術・家庭科の性質上，どんなに能力の低い生徒にも，わかる喜びを，どんなに不器用で工作嫌いな生徒にも，ものをつくるということの喜びを味わせたい。それにはどうしたらよいのだろうかなど考えさせられる。そのことは教科の研修を始めとして教育全般に対する見識を高めることではなかろうかと考えつつ，いままでの私の研修のし方をふり返り，今後のあり方を検討する必要があると思った。ここに私のつたない研修の経過の概略を述べ，ご批判をあおぎたい。

最近，教員の研修ということについては，日常茶飯のごとく言われているが，その意味するものは実力をどうつけるかということである。教員の資質向上の機会は，教育公務員特別法で保障されているものの「機会が与えられねばならない」という表現には，研修の方法は，機会が提供されるものと機会を自ら捜し求めるもの２つにわけられよう。前者が，教職の場においては最近特に多い。

しかし，その研修には義務観がともないがちであり，喜々として参加するという意欲をとかくもちえないものが多いのではなかろうか。後者は，費用の自己負担でも喜びいさんで参加するということが多い。だが，講座や実技研修の門戸を開いているところが少ないのである。

私のいままでの研修の経過の概略を教職歴とならべると表のようになる。

表　　研　修　の　概　略

年　度	教職歴	研　修　の　概　略　（履歴を含む）
昭　３３	1	毛野中学校に就職（職業・家庭科担当）
３４	2	

昭　３５	3	宇都宮大学・馬場研究室に内地留学（産業教育） 市教育研究所教育論文集に「学級集団の指導」を投稿
３６	4	県中産振研究発表（職業・家庭科，金属加工の授業）
３７	5	群馬大学にて機械実習を受講（夜間）
３８	6	足利市立中学校産業教育研修所発足（共同研修）。会員となる。
３９	7	
４０	8	関東甲信越地区技術・家庭科大会（関ブロ）新潟で提案 （「技術科教室の管理と運営について」）
４１	9	法政大学の通信教育（社会）
４２	１０	市教育研究所教育論文集に「家庭学習の一考察」を投稿
４３	１１	第二中学校に転任
４４	１２	関東短期大学初等教育科二部（夜間）に学ぶ。 市教育研究所教育論文集に「学級集団のなかにおけるひとりの生徒指導」を投稿
４５	１３	
４６	１４	関東甲信越地区技術・家庭科大会・栃木大会のリハーサル授業 栃木県教養大学一般コース・専門コース修了
４７	１５	関東甲信越地区技術・家庭科大会・栃木・金属加工公開授業を分担 市教育研究所教育論文集に「生徒会とＶＳ活動」を投稿

昭　48	16	関東甲信越地区技術・家庭科大会・群馬で提案・金属加工 （「題材選定における重みづけについて」） 技術・家庭科自主研修会発足（自主研修）。会員となる。
49	17	市教育研究所研究員研究集録「一斉授業の改善」技術・家庭科担当 市教育研究所教育論文集に「草花を通しての情操教育」を投稿
50	18	栃木県教養大学一般コース修了（2回目受講） 関東甲信越地区技術・家庭科大会・埼玉・栽培の司会
51	19	社会教育主事講習を受講（宇都宮大学） 指導法研究会・公開授業・機械（東京学芸大故和気先生の指導を受ける）

昭和33年に宇都宮大学を卒業すると職業・家庭科の免許状をもって教壇に立った。当時のこの教科の内容は，まさに産業教育全部をもうらしているといってもよく，農業・工業・商業・家庭・職業指導を含めたものであり，指導する教師もいろいろの分野を少しずつこなすため，なまかじり的であり，十分な指導も困難であった。おそらく学ぶ側の生徒にしても，当時のこの教科の思い出は，内容の一断面しか浮ばないのではないかと思える。指導していた私にしても，日々の教材研究と授業準備に追われていた。教科書と指導書を対比し，教える側の自己理解から始めねばならないという実情であった。

翌年もこの継続であり，教材研究に無我夢中であった。当時の社会は高度経済成長をとげていた時代への推移を反映しつつ，教育界にも教育課程の変遷の作業が始まっていた。そこでは職業・家庭科から新しい時代の技術・家庭科が萌芽しつつあり，現場ではその内容が工業を中心として構成されることにより，指導する教師は，それにどう対応し，どのように力を養うかということで悩んでいた。その頃，学校訪問した県教委の指導主事から内地留学制度のあることを聞き，長野校長の推薦とともに，自らも希望した。

昭和35年，希望がとおり，宇都宮大学に産業教育の研修として内地留学した。教科内容の研究を始めたものの，経験の浅薄さ，知識の乏しさを痛感しつつ，これからの教科のあり方や内容についての指導をあおいだ。

昭和36年には，毛野中学校技術科教室の建築と，それにともなう施設設備，備品の購入が始まりそのあわただしさとかさなって県中産振研究発表の準備に追われた。研究期間も短く，どのような発表をしてよいものか困惑した。だが，研究というより，新しい教科への方向ずけとして，移行をふまえての内容であった。当時，二中教諭で指導員であった野田先生の指導で，内容は旋盤操作での主軸の回転数と削り速度を目標としたもので，これからの教科内容の一端を授業公開により披論することであった。この発表をきっかけとして，地区の教科リーダーの先生方は，ひとりひとりの教師の研修

も大切であるが，先生方が集まり研修することのほうが実技を伴なう教科の性格上重要であると考えていたようだ。

昭和３７年の準備期間を経て，昭和３８年には足利市立中学校産業教育共同研修所として発足した。週１回，研修に集まり，夜おそくまで話合いや実技の研鑽に努めた。この研修は昭和４７年末まで続けられ，昭和４８年からは，月１回にし会員の自由意志にもとづく自主研修に受けつがれた。この研修の果した役割は，移行期の段階から実践段階にいたるまで，教師個々の指導上の悩み，運営に関することなどを解決してきた。未熟な私など教壇に立つ上での精神的支柱として役だってきた。

昭和３７年，旋盤操作を始めとする金属加工，機械などのより一層深い技能修得をなすべく勤務時間終了後，バスにて隣りの市にある群馬大学工学部に併設されている短大夜間部にて実習を中心として，１年間聴講生として指導を受けた。

昭和３８年からは，先に述べた共同研修の発足により，週１回の研修は楽しみであり，研修に出かける日など，他教科の先生方から「今日は共同研修ですね。よくやりますな。」という励げましと，ともにうらやましがられる状態であった。

昭和４０年，関東甲信越地区技術・家庭科大会，新潟での提案者に委嘱された。若輩のこととて，提案者を引き受けることをちゅうちょしたが，周囲の人々の助言により「技術科教室の管理と運営について」というテーマで発表した。

教職９～１０年目にかけて，日々の生活にあきたらなさをかんじて，日本美術，東洋美術などを中心に美学，哲学，倫理，史学などの講座を法政大学の通信教育で学んだ。

昭和４３年，最初の転勤をした。農村部の学校から市の中心部の学校に移ってみると，学校地域の実態の違うことから生徒のふん囲気も異なり，それになれるべく夢中で１年間は過ぎた。

昭和４４年から４５年にかけて，故漆原校長のすすめもあって隣の市にある関東短期大学の初等教育科に入学した。毎日の勤務時間が終了すると１０数キロの道をバイクにて通学した。私よりひとまわりも若い学生達と机を並べ学ぶということは楽しくあったが，ときに教科によっては苦痛わかんじることさえあった。特に音楽実技には，ほとほと困まった。また，雨や赤城おろしの強い日など，なんどか止めようかと思った。しかし，乗り出した船だ，ここで止めてはと思い，継続した。家族の協力などにより乗りきって，手に入れたものは，１枚の小学校教諭の免許状ではあるが，その１枚の紙をみると過ぎし日々が懐しく思われる。また，当時私が朝日新聞に投書して，記載された２つの記事からも思い出される。

放送大学で教員研修しては　　昭４５.１０.２５　朝日新聞

教員の研修は法で保障されておるものの，場所や経済的裏付けとなると，かなり制約される。それは，身近にある地方国立大学に夜間公開講座とか，通信教育講座がないからだ。そうなると研修はひとりで本によるほかなくなる。ほかに私立大学の通信教育講座や夜間大学があるが，その研修も乏しい給与のなかから家族を養いながらとなると，かなり苦労する。

私も大学を出てから１３年教職にあるが，内地留学という研修に恵まれたものの，その後，通信教育講座とか，いまは夜間大学の聴講生として勉強しており，月々の支払いの時は，やめよう

かと考えたこともある。昨今，放送大学が４７年に開設の報を聞き，それを全国の小中学校教員の研修の場にしてもらいたいと思う。

経費を安くし，内容も教養講座や教職員の必要な教育哲学，視聴覚講座，教育工学，心理学，生徒指導などの講座を設け，それを受講したものに試験を受けさせて資格を与えるなどの便宜をさずけてほしい。

教育の機会　自ら挿そう　　昭４６.1.２２　朝日新聞

中学３年生も３学期を迎えると，受験準備に忙しい。私の学級でも進学者は定時制高校を含めて，４５人のうち４３人で，純然たる就職者はたった２人である。だが，何のために進学するのかと問うと，その目的や人生への目標は明確でない者が多い。

そんな時本紙社会面，“さがす”の中で，すい星発見者の池谷さんが軌道計算や英文の手紙を書くために２５歳をすぎて定時制高校に入学し，現在２年生であるという記事を読んだ。次の道徳の時間にさっそく資料としてこの記事を生徒に提示してみた。生徒は「あの有名な池谷すい星の池谷さんが」と少なからず心を動かされたようである。

これを資料として利用した私の気持は，大学に行こうと中学で終ろうと，勉強に終止符を打つわけでなく，生涯教育の機会は，いくらでもあり，目的を自らさがし，求める心が大切なのだということであり，それはとりもなおさず私自身への戒めでもあった。

昭和４６年は，関東甲信越地区技術・家庭科栃木大会を前にして，研究・授業準備・公開授業のためのリハーサル，資料収集，整理などと忙しい日々であった。特に宇都宮大学の馬場先生，佐藤先生の懇切ていねいな指導と助言を数多く受けた。また，その忙しさのなかで，県社会教育課主催の教養大学を受講し，そのときの心情を下野新聞に投書し，記載されたものである。

県教養大学を県下各地に　　昭４６.7.２５　下野新聞

◇県教養大学の開設を知り，受講案内のチラシをみたとき，そして講座の主題が「７０年代の日本と日本人」であり，その講師陣も日本一流の学者であることを知ったとき，この内容こそ求めていたものだと思い，受講を希望しました。

◇幸いに受講は許され，当日の講義に間に合わせようと朝１０時４分の両毛線に乗り，昼食もとらず１２時３０分の時間ぎりぎりに間に合いました。外は猛暑，内なる県立図書館は，クーラーがきき，学習には最適そのものです。

◇やがて，オリエンテーションにより，この講座を受講したい希望者が多く人選に骨折ったことを聞き，それもうなずけました。それは生涯教育といわれるこの時代が，ひとりの人間として，その時代をいかに受けとめつつ，学習をするかとなると，暗中模索の人々が多いと思います。ところがこの講座の主題と内容が，ちょうど，大洋に漂流しているものに羅針盤を与えたかの観があったのです。

◇今後この講座を契機としての自己の学習が始まると思いますが，さらに広く県下各地にこの講

座を設けられたらと思います。まず県教委は市町村教委と共催で，できるだけ多くの会場を設けまた，予算面で無理なら県北，中部，南部ぐらいの3カ所で開いたらどうでしょう。そうすれば交通のことも解消し，受講者もいっそう幅広くなり，県教養大学の意義はいまよりさらに価値あるものになると思います。

隔週の日曜日であるが，一般コース，専門コースの両方を終了した。５０年には，足利会場のときは教養大学一般コースの２回目を受講した。

昭和４７年，関東甲信越地区技術・家庭科大会栃木大会が県下１０分科会場にて，公開授業と提案がなされた。特に足利地区は１２中学校にして，男子向き５分科会のうち，金属加工，電気の２分科会を引き受けたから一層の多忙であり，当日の発表にそなえて共同研修にも熱が入った。私の勤務校二中も金属加工の分科会場となり，教科担当者が２名であるので，提案が浅野先生，授業を私が分担して引き受けることとなった。当日全国各地からの参会者があり活発な質疑応答のうちに発表会は終了した。

このような大きな研究大会が終ってみると，皆ほっと一息し，その後の研修も停滞しがちである。そこでの研修のあり方を反省し，研修回数を週１回から月１回に減らしても，継続しようということになり自主的な研究団体として再出発した。もし中断するならば，新しく出発は困難であると思われた。それは冬場でのエンジンの始動に時間がかかることと同様であり，意欲を盛りあげることは至難な業であると思えた。会員の一人としても，事務局を受けもつものとしても，息の長い研究団体として継続したいものと考える。

昭和４８年，関東甲信越地区技術・家庭科大会・群馬での提案者に委嘱され，金属加工分科会にて「適切な実習題材により効率を高める学習指導はどうすればよいか」ということで，チェックリスト法をもちいての題材選定について提案した。

昭和４９年，市教育研究所研究員として「一斉授業の改善ー個人差を配慮しての指導法の研究ー」を，一斉授業のなかで，いくつかのチェックポイントを決め学習者個々に学習成立をはからせるにはどうしたらよいかとか。授業の流れのなかで部分的に個別指導をどのように取り入れ進めたらよいかを研究した。

昭和５０年，関東甲信越地区と全国大会を兼ねた技術・家庭科埼玉大会で三中の市川先生の提案の援助を側面からの意味をかねて，栽培分科会の司会を委嘱された。

昭和５１年，社会教育主事講習を受講。その動機は，日頃町内での仕事，納税組合，青少年育成会などを通じての近隣社会のこと，学校と家庭，学校でのＶＳ活動のあり方を再吟味し，自らがどうそれとかかわりあい生活できるかを考えてみたいと思った。講習の内容より講習を通じての人と人との触れ合いこそこの講習での最高の収穫ではなかったかといえる。このことは，人と人との出合いや触れ合いが生活の基幹ではなかろうかとかんじさせるように変ってきた。

昭和５２年，父母をなくし，自らも病を得た年であった。それに自主研修会が始って最初の県中教研の指定を足利地区が受け，１１月１１日の指導法研究会の日に坂西中にて発表会をもった年でもある。病の床で本を読み，健康が回復してから本を読んだのでは，前者と随分意味が異なる。読書も大

切だが，現実の難局に当面すると，どう対処したらよいか困惑する。やはり事前研究も現実対処も，事後対策もいずれも重要であると思っている。しかし，ひとりの研究も大切だが，校内いや地区の人々と，ともに手をたずさえての研修や研究が一層重みをまし，前進を図るものだと確信している。
また，今後幾年教職にたずさわろうとも，初心の知識に対するどん欲さを失ないたくないものである。教科に関しても広く深く，また，人間としての幅を広げていきたいものだと思っている。

（昭和５３年１月）

評

教師の研修の重要性が，教師のあり方の中で今日ほど強く問われていることは，かつてないのではないかと思われます。そうしたときに，教職２０年の研修を顧みて，今後の教師としての在り方の指針を求めようとすることは，時宜を得たものとして読者の共感をよぶであろうと思われます。

今日の情報化時代に最も要求される人材として，Ｔ字型専門家とよばれるタイプの専門家，すなわち，自分の専門の関連領域にかなり広い間口をもち，なおかつ自分の専門領域では創造的な能力の深さをもつ人をあげられています。こうした視点は，創造的な教育活動の分野においても要請される考え方でありますが，筆者の研修に対する基本的な考え方も，「教科の研修を始めとして教育全般に対する見識を高めること」にあるように，まことに透徹した考えのように思い，敬意を表する次第です。さらに，筆者が自ら機会を求めて研修し続けてこられ，特に，昭和３８年から発足した産業教育の共同研修に参加するかたわら，通信教育や，関東短期大学初等教育科の夜間部に１０数キロの道を通うなど，研修への執念が伺えます。

「ひとりの研究も大切だが，校内いや地区の人々と，ともに手をたずさえての研修や研究が一層重みをまし，前進を図るものだと確信している。」

この筆者の実践から生まれた信念に，今後の精進と成果を大いに期待したいと思います。